

飯塚レポート①『介護サービスの根源』

言うまでもなく、日本は資本主義国家であり、資本主義国家が提唱する企業の定義は『利益の追求』である。従って、営利法人が持つ社会的存在は利益のほかはない。

そのため、日本では社会福祉法人や医療法人など、『利益の追求』が目的ではない法人形態を敷いている。医療法人が誇大広告を禁止しているのは、利益を追求するのが目的ではないからだ。即ち、公共の福祉に値する業種であると、お墨付きを頂いているということである。

ノーベル平和賞のムハマド・ユヌスは現在の資本主義が、人間について利益の最大化のみを目指す一次元的な存在であると見なしているとする。これに対して人間は多元的な存在であり、ビジネスは利益の最大化のみを目的とするわけではないとユヌスは主張する。つまり、利益を追求するビジネスモデル以外に社会の課題を解決することを目的とするビジネスモデルがあるのではないかと説く。

ユヌスは、利益の最大化を目指すビジネス(PMB)とは異なるビジネスモデルとして、「ソーシャル・ビジネス」を提唱した。これは、いわゆる『社会起業家』がこぞって行っている例のやつである。ソーシャル・ビジネスとは、特定の社会的目標を追求するために行なわれ、その目標を達成する間に総費用の回収を目指すとして定義している。

また、ユヌスは2種類のソーシャル・ビジネスの可能性をあげている。

一つ目は社会的利益を追求する企業である。

二つ目は貧しい人々により所有され、最大限の利益を追求して彼らの貧困を軽減するビジネスである。

社会的利益とはなんだろうか？これも、2つに分けられる。

一つは、困窮層に対する救済であり、広い意味での社会福祉事業である。ここで僕が言う困窮層とは『不潔・怠惰・無知・疾病・貧困』であり、「健康で文化的な最低限度の生活水準に対して、それ未満である状態」だと考えられる。そこに対してのアプローチ。調和が取れた社会では必須のものである。こいつは社会の底上げ、ボトムアップである。旧来から行われていることで、教育・福祉を筆頭に、対象者ややり口は違えども、日本では聖徳太子の時代から歴史書に記されているものである。

二つ目は、一般社会に対する新しい幸せの創造である。今の社会全体をレベルアップすること。であり、新しい価値観の想像には資本主義社会が大いにその威力を発揮するのだろう。カラーテレビ・冷蔵庫・車・携帯電話……。高度成長期にはモノ・仕組みが発達し、人々は全て、豊かになった。産業革命などという言葉もあるように、一種の社会革命が方々で起こる。

介護・医療ビジネスはまさしく、一つ目にあたる。しかしながら、介護事業を民間へ解放した意味は何であろうか？
恐らく、国は、現在の介護ビジネスに対する閉塞感を打破したいと思ったのだろう。つまり、社会的利益において、福祉と創造を兼ねた展開をしてほしかったのではないか？

であるなら、僕たち民間企業は、社会福祉法人と比べて、より、創造的であり、より、福祉的なサービスを融合しながら運営をする必要がある。社会福祉法人では出来ないことを積極的に行う必要がある。

利益の追求だけでなく、また、救済だけではない、新たなビジネスモデルは私たち民間事業者が作り出していくのが社会的責任ではないか？と思っている。